

浄慈院 山澄先生が 体験された方に聞いた話



空き地などには、沢山の銃弾や爆弾の砲弾が落ちていた。当時、小学校1年生位の子どもたちが、それを集めてかなづちで打っていたら、爆発して腕が吹っ飛んでしまった。当時、戦争に反対すると非国民と言われ、いじめられたり差別されたりした。今は違って、ランドセルみたいなかばんは厚紙で作ったり、わらじも自分で作ったりしていたんだよ。「ほしがりません。勝つまでは」という標語もあり、ぜいたくできなかったんだから。

生の声でお話を聞くことで、戦争がいっそう身近なものとなる。

当時 花田小学校4年生 羽田野さんの話



食べる物が本当になくて、苦しい生活が毎日続いていたよ。そこら中の道路や空き地を畑にして、サツマイモやかぼちゃを植えていたよ。花田小の運動場の南半分を畑にしてサツマイモを植えてた。でも、野菜を育てる肥料が無いから、馬ふんを道路に拾いに行って、それを肥料にしていた。いなごを取りにいったって焼いて食べたりもしたよ。学校では、夏休みの宿題に、軍馬の干し草を集める宿題があったよ。空襲警報が鳴ると、走って家まで帰って、空襲警報が解除されると、また学校に戻っていた。終戦近くになると、毎日警報が鳴っていて授業どころではなかった。そんな中でも毎週日曜日には、朝6:30に羽田八幡宮に行き、「必勝祈願」を行っていたんだよ。

花田小学校6年生の授業の様子



こうした学習を通して、子どもたちは、今まで自分とは関係のないもの、ゲームの中のことぐらいに捉えていた「戦争」を、それまでとは異なり、身近な問題として考えるようになる。また命の尊さについても深く感じるようになる。

**記録は遺さなくてはならない。
記憶は伝えなくてはならない。**

兵東政夫氏著「軍都豊橋」まえがきより抜粋